日本財団 THE NIPPON FOUNDATION　海と日本 PROJECT

千葉の海辺 新聞コンクール

■執筆・紙面構成　高橋　舞衣　船橋市立法典西小学校５年

三番瀬の干潟には魚を食べる鳥たちが集まる

生き物いっぱい三番瀬に

私達のできること考える

昔の三番瀬は、カレイなどたくさんの生き物がいました。干潟はカレイのように平べったい魚がすみやすかったそうです。理由としては水深が浅く、平らでないと生きるのにとても大変になってしまうから。魚にとっての水は、人間でいうと空気ぐらいとても大切なものです。

現在の三番瀬では、鳥が多く見られます。くちばしの長い鳥も多く、その長いくちばしを生かして魚を取って食べています。このまま鳥がたくさんの魚を取っていってしまうと、魚が減ってしまいます。鳥は魚を取ってしまうのは自然なことで、どうにかできる問題ではありません。魚も増えて生き物がいっぱいいる三番瀬になるように私達のできることを考えていけたらいいなと思っています。

漁師守った光、明治に点灯

船橋大神宮の灯明台

かつて漁師たちを守る役割を果たしていた「灯明台」

船橋市内の児童が、地元に伝わる民話「雪どけ塚の白ヘビ」をテーマに取材や写真撮影など新聞制作に挑戦した。日本財団などオールジャパンで推進する「海と日本プロジェクト」の一環で、国内に残された海にまつわる「民話」「伝承」を選定し、子どもがさらに次世代へと伝える機運醸成を狙っている。船橋市立法典西小学校5年の高橋舞衣さんが執筆した紙面を紹介する。

明治時代の夜、人々の目印となる光を放つ場所は多くはありませんでした。民話「雪どけ塚の白ヘビ」では、夜になると白ヘビの目が光り、沖で嵐に遭った漁師を陸地へと導きました。実際に白ヘビは存在していなかったと思いますが、光は貴重な存在だと伝えています。

船橋市では明治時代から漁業が盛んで、漁師たちは夜まで魚をとっていたときは陸地の光を目印にしていました。昔、船橋大神宮には常夜灯があり、明治時代には灯明台が作られて第2次世界大戦ごろまで使われていました。常夜灯や灯明台が作られた理由は、船橋大神宮に小高い場所があり、海から光が見えやすかったからです。

光は昔から私達の生活を守る大切な役割を果たしてきました。現在、光は簡単に使えるようになり、身近な存在になっています。この取材で光の大切さを知ることができました。

文化財大切に受け継ぐ

たくさんの人に伝えたい

文化財は、日本の歴史の中でご先祖様によって今日まで大切に受け継がれているものです。だから、私達も大切にして未来に受け継ぐことを繰り返して、たくさんの人に知ってもらうことが大切だと思います。

船橋市内で、県が大切にしているものは灯明台。昔から灯明台に似たものは使われていました。昔は光がとても大切で、漁に出た人が帰る方向が分からなくなったら光を目印にしていました。だから今でも灯明台はあります。

他に県が大切にしているのは、下総三山の七年祭り。昔から受け継がれています。県と国が大切にしているのは取掛西貝塚。貝塚は昔の人々の暮らしがわかります。このことから国も昔のものは大切にしたいということがわかる。市や県、国が大切にしているものは、私達にとってもとても大切なもの。だからこれからも、さまざまなものを大切にしていこうと思う。

日枝神社には「わらへび」が巻き付けられた鳥居もある

編集後記

新聞作りは大変で楽しい

船橋市立法典西小学校5年
高橋　舞衣さん

高橋舞衣さん

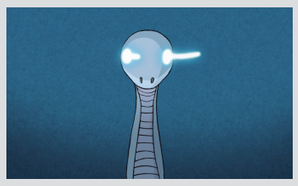
新聞は社会科だけで作れるものだと思っていたけれど、国語の力が必要だと感じました。聞く力、書く力、聞いて覚える力、たくさんの知識がないと新聞を作るのって大変だと感じました。

3つの場所を取材して、たくさんの発見をしました。漁業の話、歴史の話、船橋のことについて、知ることができました。今回は「雪どけ塚の白ヘビ」が中心にやっていたけれど、他のでも楽しくできると思いました。久しぶりにたくさんの人といろんなところを巡ってすごくたのしかったです。（お弁当もおいしかったです（笑））。

今回新聞記者を体験して、新聞作りはこんなに大変なんだなと思った。けれど、とても楽しかったです！

海と日本プロジェクト

さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海で進行している環境の悪化などの現状を、子供たちをはじめ全国の人たちが「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、日本財団、総合海洋政策本部、国土交通省の旗振りのもと、オールジャパンで推進している。



「雪どけ塚の白ヘビ」のワンシーン

雪どけ塚の白ヘビ

昔、夏見城を囲む土塁の近くに「雪どけ塚」と呼ばれる不思議な小高い塚があった。松の木の根元の穴に住む白ヘビは夜になると姿を現し、光る目の美しさと、やさしく気品のあるたたずまいで村人を魅了していた。ある日、出漁していた漁師が嵐に遭い、沖に流された。遠方に見つけた青い光を白ヘビの目だと信じて死に物ぐるいでかいをこぎ続けた…。

一般社団法人 日本昔ばなし協会